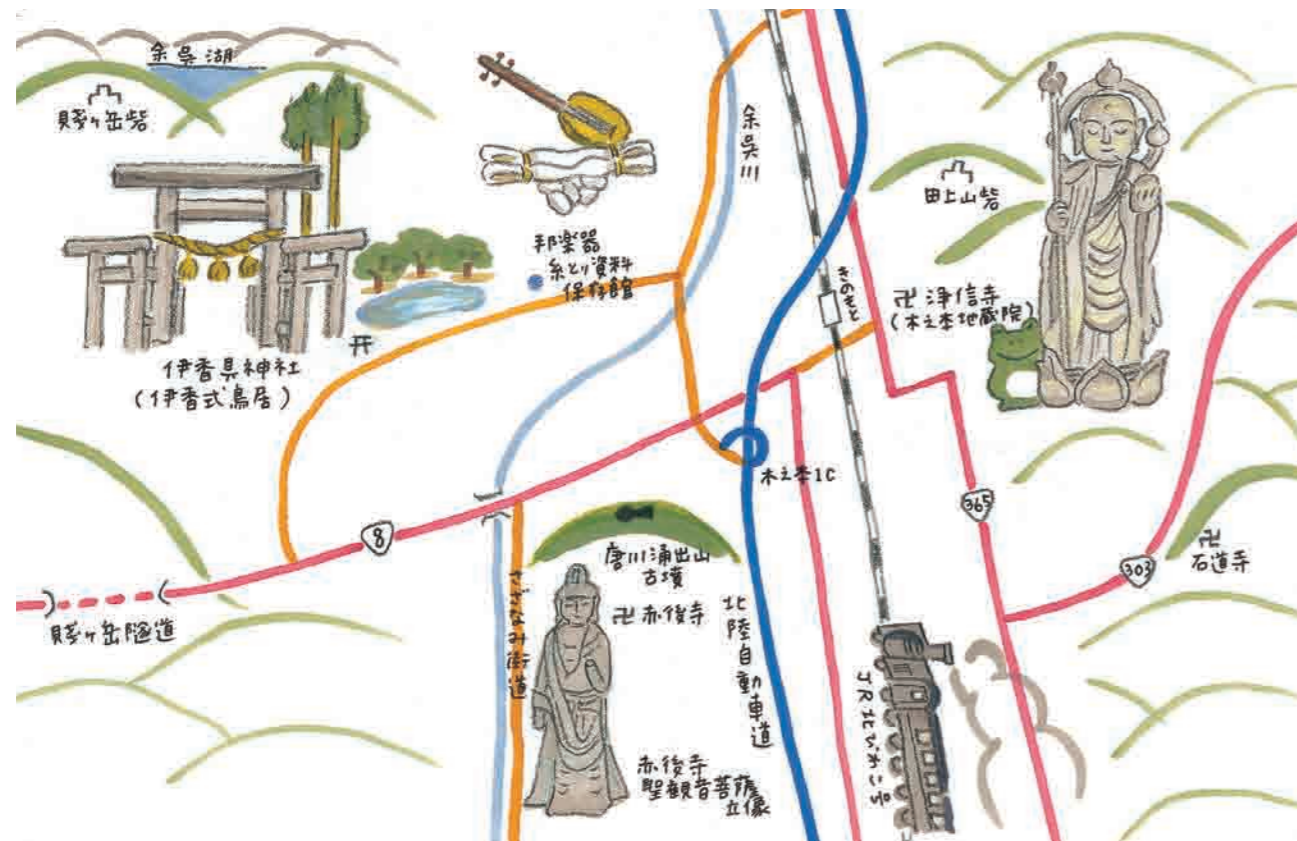


周辺のみどころ

邦楽器原糸製造に関する資料を展示するのが糸とり資料保存館（木之本町大音）である。当館は大音で料亭を営んでいた林正昭氏（故人）が、邦楽器原糸製造の伝統技術が衰退する現状を憂慮し、昭和53年（1978）に茅葺き屋根の民家を買って、製糸関係の資料を集めて保存・公開する場として開館された。実際に使える煮繭用のコンロと鍋も置かれ、事前に申し込みがあれば、区内の糸を紡ぐ技術を持った女性に来てもらい、糸つむぎを実演してもらっている。



糸とり資料保存館



[アクセス]

●JR北陸本線木ノ本駅下車、車で5分

[もっと詳しく知りたいひとへの案内] (関連文献/関連施設)

- 木之本町邦楽器原糸製造保存会『邦楽器の原糸づくり―「いかぐ糸」の世界―』（パンフレット）
- 野間晴雄『邦楽器糸制作（選定保存技術の記録）』木之本町

邦楽器糸の里

伊香郡木之本町大音・西山



糸とり作業の手元

賤ヶ岳の麓に位置する大音・西山の里は、「琴糸の里」「糸引きの里」とよばれ、琴や三味線、琵琶、胡弓など、邦楽器で使う楽器糸（絃）の原糸となる生糸生産が伝統技術として受け継がれる。

その特色は艶やかな光沢と、強靱さで、水上勉の小説『湖の琴』にも取り上げられている。こうした上質な生糸の製造には、熟練した伝統技術とともに、賤ヶ岳の麓から湧き出る清浄な水によるところが大きいといわれる。その名残か、現在も大音の里には、昔から地元の人々が大切に用いてきた清水と呼ばれる池が点在する。





大音の里

邦楽器糸の里

所在地 伊香郡木之本町大音・西山

邦楽器原糸製造の歴史と背景

大音・西山にはそれぞれ生糸の生産技術にまつわる由緒が伝えられる。大音では、伊香具神社の祭神伊香津臣命の子孫にあたる伊香厚行が平安時代の昌泰2年(899)に伊香具神社境内にある湧水から清水を引き、繭を煮て生糸をつくったところ、都で大変な評判となった。以後、当地で生糸が生産されるようになったという。西山でも、平安時代の弘仁8年(817)に製糸業が始まり、当初は衣服や刀、冠の紐などに用いられたが、後に楽器糸として加工されたという。以上はいずれも伝承であるが、木之本一帯は伝統的に養蚕業や製糸業が盛んで、近世以降は生糸の有力な生産地として繁栄し、明治期には大規模な製糸工場も設立された。

当地で邦楽器の原糸が製造されるようになったのは、明治末頃に加工技術が導入されてからといわれる。昭和初期には従業員数、生産高ともに最高水準に達し、全盛期を

むかえた。しかし第二次大戦後は邦楽器を手にする人の数が減少し、ナイロン糸やテロン糸などの化学繊維が開発され、伝統技術による邦楽器原糸製造も衰退する。さらに、糸とり作業に携わる女性労働者が高齢化する一方、手作業であること、年間を通じて就業期間が限られていることなどから後継者が不足し、この業を営む家は現在わずか数軒のみとなっている。

邦楽器原糸製造の伝統技術は、邦楽器を用いる雅楽、人形浄瑠璃、文楽、歌舞伎など、日本の伝統芸能にとって不可欠であることから、平成3年(1991)に国の選定保存技術に認定され、現在は技術の保存および伝承者の養成が図られつつある。

邦楽器原糸製造の工程

邦楽器の糸は商品として流通するまでに、大きく分けて養蚕、製糸、加工という三つの作業を経る。養蚕は蚕を飼ってその繭から生



大音の里に残る清水



糸とり作業で使う座繰機

糸とりを経て出来上がった生糸

糸をとる作業で、まず蚕の卵を孵化させ、桑を与えて飼育する。そして、繭を作るための足場となる簇に蚕を移し、繭をつくって蛹となると、簇から繭をはずして出荷する。

製糸は繭から邦楽器の原糸(特殊生糸)を作る作業で、選定保存技術「邦楽器原糸製造」の保持者などが担う。一般の織物用とは異なり、糸に強度が求められるため、手作業による特別の製造方法によって行われている。まず繭(楽器糸は最も上質な春繭に限られる)の仕入れから始まり、熱風で乾燥させて蛹を殺すが、邦楽器原糸製造の場合は、蛹を完全に殺さない生挽を特色とする。その後、座繰機を用いて繭を熱湯で煮沸しながら手作業で繭の糸を集積器に集める糸とり(繰糸)作業

をおこなう。全工程の中でも、この糸とり作業はもっとも時間と労力を要する厳しい作業である。糸とりによって小枠に巻き取った生糸は、大枠に巻き直され、仕上げの工程を経て邦楽器の原糸が完成する。

邦楽器の原糸は邦楽器糸製造業者に供給され、およそ12の工程からなる加工が施されて楽器糸(絃)に姿を変え、邦楽器業者・卸売業者に出荷される。絃は楽器によって糸のかけ方、太さなどが異なり、作業の内容も微妙に異なる。さらにひとつの楽器においても性質の異なる複数の糸がある。これらの作業は次第に機械化される傾向がみられるが、もっとも肝心な工程では、長年の修練による技術が不可欠のものとなっている。